

二次元パチ文庫

2D PETIT POCKET NOVELS



怪盗

KAITO  
OSHIOKI-  
HAREM

おしおき

ハレム 外伝

編 女教師に翻られ

筆祭競介 表紙 / わしみゆーこ

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『怪盗おしおきハーレム外伝 女教師に黽られ編』  
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『怪盗おしおきハーレム』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



怪盜 KAITO  
おしおき OSHIOKI-  
HAREM

# ハレム 外伝

女教師に罦られ編

筆祭競介  
表紙／わしみゆーこ

## 登場人物紹介

---

### Characters

せがわともひこ

#### 瀬川智彦

世間を騒がす6人の女怪盗から宝を守り続ける少年探偵。宝珠学園高等部に通う。

あやの

#### 綾乃

伶俐な印象の美女。智彦のクラス担任だが、その正体は怪盗クイーンダイアである。

#### リオジーナ

ブラジルから来たラテン系の美女。現在は智彦の通う学校の体育教師だが、その正体は怪盗レディバンサー。

少年探偵・瀬川智彦は教室の席に座っていた。

智彦が少年探偵として有名になったのは約一年前からのことである。

当時、複数の女怪盗たちが経済大国日本に集まったお宝を日夜盗み続けていた。そんな中、世界的に活躍していた女怪盗の一人を、彼の推理によって逮捕したことにより瀬川智彦の名前は一躍世界に知れ渡ったのだ。

それ以降も、日本では六人の女怪盗が世間を騒がせていた。智彦はアドバイザー的な立場で警察に協力し、六人の女怪盗から様々なお宝を守り続けている。

そんな天才少年が今一番頭を悩ませているのは、ある同級生との仲についてだった。

——この機会になんとかしないとイケない。

手にしたプリントを眺めている。学校行事であるキャンプのおしらせだ。智彦の通う宝珠学園では毎年、高等部の二年生が県営のキャンプ場で林間学校を行うことになっていた。チラリと視線を横に向ける。

そこには鮮やかな赤毛をポニーテールにした少女が座っていた。

彼女の名前は火村さやか。このクラスの学級委員長であり、廊下を歩けば皆が振り返る学年一の美少女である。均整のとれたプロポーションも素晴らしく、この年齢の少女特有の健康的で伸びやかな肢体をしていた。

さやかはその凜々しい瞳を手元のプリントに向けている。姿勢の良さとシャープな横顔に智彦はぼーっと見惚れてしまう。

——さやかさんって、大人びてるのに可愛いく見えるんだよなあ……。

一瞬だけ盗み見るつもりだったが、なかなか視線を外せない。

するとさやかの瞳だけがスッと横に向けられた。

視線が合う。赤毛の少女は別段驚くこともなく、キッと視線を強くして睨んできた。どうやら智彦の視線に最初から気付いていたようだ。気配で察したのだろう。

さすが怪盗フレイアだ。

この美貌の学級委員長こそ、世間を騒がせているスゴ腕の女怪盗六人のうちの一人、怪盗フレイアだった。

彼女を盗み見ていた智彦は、その視線にギクリとしたがすぐに愛想笑いを浮かべた。しかしさやかの視線は緩まない。益々強烈に睨まれてしまい慌てて視線を手元のプリントに落とす。最近では口を聞いてくれないどころか、顔を合わせればこのように睨まれしまう。

——はあっ……。

心の中で重い溜め息をつく。

彼女が御機嫌ナナメなものには訳があった。

智彦とさやかは既にお互いが好きあっていることを確認している。つまり両思いなのだ。

7

身体を結んだこともある。

しかしそれと同時に智彦は他の女性と関係してしまつたのだ。しかも全員がさやかと同業者——女怪盗ばかりである。

智彦があまりに彼女たちの仕事を邪魔するため、〃おしおき〃目的に拉致監禁されたことがあつた。その際、様々な理由で彼女たちから性的な虐待を受けたのだつた。ただ智彦も元気で健康な男の子である。全員が類似稀な美女や美少女ばかりだったので、虐待というよりは、〃ハーレム〃のような気分を味わつたともいえる。

六人の女怪盗と共にした官能の世界は、男にとつてそれこそが最高のお宝だつたかもしれない。

問題はその六人全員が、今現在、智彦の生活圏の中にいることだつた。それは宝珠学園中等部の後輩だつたり、一学年下の留學生だつたり、下宿先の奥さんだつたりとバリエーションは様々だ。そしてことあるごとに自分にまとわりついてくる。ウブで生真面目な性格の智彦は、何事にも積極的な彼女たちを上手くあしらうことができなかった。

心を鬼にして毅然と突っぱねたこともある。無駄だつた。ほしいものは盗んででも手に入れる彼女たちである。智彦に対するアプローチは全く収まらなかつた。

そして、それを間近で見せつけられ続けたさやかが完全に怒つてしまつたのだ。他の女にモテモテ状態の恋人に対し、強烈なやきもちを焼いてしまつてゐる。

そしてこの教室にも問題の女怪盗が二人いた。

一人は教室の前に立ちキャンプの説明をしているクラス担任の女教師、綾乃。

今日は濃紺のスーツにブルーのカッターシャツ、そして紫色のネクタイというマニッシュな装いをしている。知的な美貌とクールな物腰にその寒色系のファッションがとても似合っていた。

——でも、その正体は女怪盗クイーンダイヤモンドヤなんだよね……。

そして彼女が極度のショタコンであることを、智彦は身をもって知っていた。

そしてもう一人は腕を組んで窓際に立っている副担任のブラジル人体育教師、リオジーナ。

美しさと力強さが混在した褐色の美貌はいつもニコニコと陽気である。肉感的な長身をいつも着ている平凡なデザインのカジュアルなジャージ上下に包んでいる。

クールでハイセンスな綾乃とは何もかもが対照的な副担任だが、やはり彼女の正体もレディパンサーの通り名で知られる女怪盗だった。

二人を見ると自然と顔が赤くなり、下半身がムズムズしてしまふ。自分を『おしおき』した六人の女怪盗の中でも『テクニク』では一、二を争う二人だからだ。

智彦の脳裏に二人との行為が甦る。以前、監禁されたとき味わった大人の女の肉体とテクニクは、少年探偵の脳味噌を淫欲でドロドロに融解させるほど強烈なものだった。



思わずズボンの前が硬くなり、慌てて片手で押さえつける。

「……サイテー」

ボソツと隣からブリザードのような極冷のセリフが浴びせられた。さやかだ。智彦が二人の女教師を見ながら勃起したことに對する軽蔑の一言だった。

これでまた、さやかとの亀裂が深くなつてしまった。

——なんとかしなくちゃいけない……。

智彦は改めてキャンパス内のプリントに目を落としたり。

※

林間学校最後の夜、智彦はなかなか寝つけなかった。モンモンとしている。このキャンパス中一度も自慰をしていないためか、やけに身体が火照り股間の疼きが収まらない。

——五日も抜かないなんて高等部に上がってから初めてかもしれないもんな……。

優等生の智彦でも年頃の男子であることに変わりはない。それどころか柔和なルックスに似合わぬ巨根の持ち主で、精力はかなり強いほうだ。そのため牡の生理をほぼ毎日処理していた。

昨夜まではキャンパスの疲れですぐに眠りにつけたのだが今日はそうはいかなかった。

周りでは同じ班の男子たちが寝息を立てている。初日こそ友人だけの夜に興奮し朝方近くまで皆起きていた。しかしキャンパス五日目ともなると完全に疲れきっており、全員が熟

睡しているようだ。そんな健全な友人たちを見てみると、自分だけ異常に性欲が強いような、嫌な気分には陥ってしまう。

智彦はジャージ姿のまま毛布から這い出した。他の男子たちを起こさないようにソツと扉を開く。バンガローの外は完全に森の中だった。空気が冷たい。

——少し散歩でもして身体を冷まそう……。

智彦はゆっくり歩きはじめた。

このキャンプ場は現在、宝珠学園が貸しきっている。消灯時間を過ぎているため全く人がない。これもキャンプ初日の夜には、はしゃいだ生徒たちがまばらに徘徊していたのだが、今夜はシンと静まりかえっていた。

「……結局、さやかさんと仲直りできなかったな……」

キャンプ中は常に班行動で、男女の班が毎回くじでカップリングされていた。しかし運悪く智彦の男子班とさやかの女子班の組み合わせは一度も実現しなかった。そのため約一週間ともにあいさつもしていない。

——さやかさん……今ごろぐっすり眠ってるのかな……。

モンモンとしている若い肉体と、長い期間恋人に会っていない禁断症状があいまって、無意識のうちにさやかのバンガローに足を向けていた。別に夜這いをかけようだとかそういう気持ちは全くない。ただ一週間近くもまともにさやかの姿を見ていないので、散歩の

ついでにチラッと彼女が眠る小屋を見てこようとしただけだった。

「あっ。あれだな……」

目的のバンガローが見えた。当然消灯しているし人が起きている気配もない。それでも、さやかが偶然出てくるような僥倖を期待して、ボンヤリと森の中に立っていた。すると――。

「んっ?」

小屋の近くに何か白いモノが落ちていることに気付いた。月明かりしかないとため息にそれが何かわからない。何の気なしにその白い物体に近づいて拾い上げる。

——えっ!! こ、これって……。

学校指定の女子用体操服だった。名前が書かれている胸の部分を見ると、  
「う、うそ……」

智彦と同じ学年と組が書かれている下に『火村』とマジックで書かれていた。  
同じクラスに火村という姓は一人しかない。

——こ、これ……さやかさんの体操服!?

驚いて智彦が顔を真っ赤にした直後だった。

パッ。

月の光だけに照らされていた視界が一瞬白く輝いた。背中からフラッシュを焚かれたよ

うだ。びっくりして振り返る。

パッ。パパパッ。

続けざまに白い光が瞬く。その閃光から目を保護するために体操服を握った片手を上げる。そして白い光の瞬きが終わると智彦は恐る恐る手を下ろし、改めて前を見た。

「あ……綾乃先生と……リオジーナ先生……」

そこには女教師が二人立っていた。思ったより距離が近い。いつのまにこんな近くまで来ていたのだろう。

「瀬川君、ちょっと先生たちのバンガローまで来てくれる？」

デジカメを持った担任教師が顎を軽く後ろへしゃくつた。

「な、なんですか……そ、そんなの嫌ですよ」

この二人はただの教師ではない。以前、自分を拉致して監禁したこともある女怪盗なのだ。智彦は数歩後ずさり二人から距離をとった。

「トモヒコ。このジョウキョウでそれはないネー」

副担任が芝居ががかった仕草で両肩を竦め、ヤレヤレと頭を横へ振る。そして豊満なバストの下で長い腕をゆったり組むと、わざとらしく困った顔をした。

「私たちは学校の先生で、君はその生徒。今は林間学校の就寝時間で、ここは女子用バンガローの前。オマケに君が手にしてるのは女子の体操服。これで生徒指導しなくて教育者

といえるかしら？」

綾乃は流れるようにそれだけ言う口元を僅かに吊り上げた。それは狙っていたお宝を手中にしたときに、怪盗が浮かべるであろう会心の笑みだった。

「センサーとしてジックリおしおきしなくちゃいけないネー」

一瞬で間合いを詰めたりオジーナに手首を掴まれても、智彦は何も抵抗できなかった。

智彦は女教師用バンガローの中で正座していた。

目の前では綾乃が両足を横に流して座り、その隣ではリオジーナが長い足を胡座にしている。今回の引率教師で女性は二人しかいないため、このバンガローには綾乃とリオジーナしかいなかった。

部屋には二人が持ち込んだのか、ハンモックがセットされていた。さぞかし快適なキャンプ生活を送っていたのだろう。鮎詰め状態の自分のバンガローとは大違いだ。そしてこの部屋に漂う芳醇なやさしい匂い。男だけで五日間生活してきた自分たちの汗臭いバンガローと違い、女性の部屋特有の甘い香りが充満している。モンモンとしている少年は、それだけで下半身が疼きだしていた。

智彦はその匂いを振り払うように口を開いた。

「僕を……ハメましたね」

そんな智彦を見て二人の女教師は更に瞳を潤ませた。綾乃にいたっては既に息を軽く弾ませている。少年が見せる葛藤の表情がたまらなくソソるのだろう。

「んー。トモヒコー。こっちはとつてもスナオなのにー」

リオジーナはビキビキに張り詰めた男根を目の前にして、はあっ、と息を吹きかけた。

「くはああっ！」

智彦は大きく仰け反った。暖かい空気の塊が男根に直撃しただけだというのに、強烈な快感が全身を駆け巡る。全身舐めで蓄積された性感の高まりが、ペニスを異常な感度に高めていた。息の温もりが肉棒の芯まで染みこんで、たちまち先端の切れ込みからジワッと先走りの汁が滲み出す。

最初はぷっくりと透明な珠を結んだが、我慢汁が滲み続けているために今すぐにでも糸を引きながら垂れ落ちそうだと。

「ああん、たままない」

綾乃はペニスの真下に移動した。ツンと尖った細い顎を僅かに反らし、その美貌を上向ける。んはっ、と口を大きく開けると舌を限界まで突き出した。滴るカウパー腺液を受け止めようとしている。そのあまりに淫猥な光景に智彦の男根がビグンと跳ねた。

その振動で珠になっていた粘液がツウと流れる。ねっとり糸を引きながら女教師の舌に垂れ落ちる。その瞬間、綾乃がアフンと漏らした甘い鼻息が肉先を直撃し、更に我慢汁が

滲み出た。桃色舌に透明の粘液がトロトロと絡まり続ける。何しろ五日間抜いていない。大量のカウパー腺液が肉先から溢れ続けた。

「ああん。アヤノだけズルいですネー」

リオジーナも加わる。男根と牝舌の間にずいっと割り込んで、滴る粘液を先に受けてしまう。しかし、すぐに綾乃がその上に移動する。そしてリオジーナが更にその上に舌を伸ばした。二枚の美しい牝舌はすぐに男根の先端直下にまで到達してしまふ。そして、へろんつくちゆるるつ。

大振りで活発に蠢く紅舌と、形良く尖った桃色舌が濃厚に絡みあいながら、滴るカウパー腺液を舐めとりはじめた。ヌルヌルと滑らかに蠢く二枚の肉片はあまりに魅惑的で背徳感すら漂わせている。それにトロトロと降りかかる粘液が自分のペニスから滲み出た体液だと思つと、ブバツと鼻血が噴出しそうになるほど頭に欲情の血が昇つた。

——こ、こんなのエッチすぎるよお……。

褐色の肌をした精悍な美貌の体育教師と、知性漲る美貌をうっとりとして桃色に染めている担任教師が、舌だけを突き出しカウパー腺液まみれになりながら濃厚にペロキスをしているのだ。しかもそれが自分の肉先の僅か数センチ下で行われている。少年の妄想を遥かに上回る淫猥な光景だった。

「ふううんっ……くちゅっ、んんんんっ」

「ああんっ、りおじいなあっのした、ちんぽ汁ですごいヌルヌルうっ」

二人は口を開いたまま激しく舌を絡めあっている。そのため肉先にふはっふはっと思が吹きかかる。まるで官能の炎で肉棒が燻されているようだ。吹きかかる女の息だけで、男根が快感でビクンビクンと跳ねてしまう。

——おちんちんがジンジンして、気が狂いそうになつてきた……。

ほんの少し二人が顔を上げるだけで、あのねっちりと絡まりあっている舌が自分のペニスに触れることだろう。ヌルヌルと滑らかに動く二枚の肉片が、最も敏感な肉先に絡みつくのだ。

以前、監禁されたとき何度もダブルフェラを経験していた。ときには三人同時にしゃぶられたこともある。単独の口腔性交では味わえない快感だった。

しかしこのコンビに同時にフェラされたことはない。性のテクニクでは群を抜いている二人である。その二人に同時にしゃぶられたら……。

その感触を想像しただけで脳味噌が蕩けそうだった。あまりに淫靡なその妄想に智彦の理性が屈服する。耐え続けていた屈服のセリフをとうとう口にしてしまう。

「ああっ、な、舐めてっ下さい……」

弱々しい掠れ声で呟いていた。恥ずかしさで耳の先まで赤くなる。

それを聞いた二人の女教師は濃厚なベロキスをやめた。好色でなおかつサディステイツ



クな色を隠そうともせず少年の痴態を見上げる。二人とも瞳が潤みきっていた。

「何を舐めてほしいの？ 何をどうしてほしいのか、もっと具体的に言ってみなさい」

綾乃が極度に上擦った声で口走る。リオジーナにいたっては舌を出したままヘッヘッへと荒い息を繰り返し、餌を前にお預けを命じられた牝犬のような表情をしていた。女教師たちも智彦に負けないほど焦れている。それでも尚少年を焦らす二人に、言葉にできない性の深みを垣間見た気がした。

智彦は一度口を開きかけて、すぐに噤んだ。やつぱり恥ずかしい。でももう我慢できない。限界だ。少年はギョツと目蓋を閉じると羞恥心を吹っ切るように口を開いた。

「お、おちんちんしゃぶってください！ 先生たちのエッチなお口で、僕のちんちんむしやぶりまわしてください！」

哀願していた。本心から叫んでいた。

くちゆるるっ！ むちゆうんっ！ ぺろちゆるるるっ！

その直後、女教師たちの唇が限界まで焦らされていた少年のペニスに躍りかかる。長時間お預けを命じられた牝犬が餌を貪るような激しさだった。お互いの唾液とカウパー腺液でぐちよぐちよになつていた舌が、同時に小穴を舐める。柔らかな唇が同時に肉先を咥える。まるでペニスを挟んで濃厚なディープリキスをするように女教師の口腔が少年の亀頭を密閉する。唾液の熱さと舌の滑らかさ、そして唇の柔らかさに智彦は大きく仰け反った。

強烈な快感が肉先でスパークし、全身に向けて電撃のように駆け巡る。

散々焦らされて、突然始まった極悦のダブルフェラにもうイキそうだ。

「まだ、ダメよ！ 私たちがいいって言うまでイッチャだめ！」

綾乃の命令だった。

「まだハジめたばかりなのにスグにオワるのつまらないネー」

「勝手にイッたらあのデジカメ、フレリアにバラすわよ！」

その言葉にグッと奥歯を噛み締めて射精するのを踏ん張った。両手両足に力がこもる。拳を強く握り締め、足の指をギュッと丸めこみ、なんとか肉悦の大波をやり過ごす。

「くはああつ！ あつふあああつつ！」

しかし無防備に垂れ下がる肉棒に、女教師たちの舌と唇が襲い続ける。

リオジーナの舌が大胆に先端から根元までを一気にベロンと舐め上げると、綾乃の唇が肉傘の裏にへばりついた。そのまま肉先を飲み込み、知的な美貌が歪むほど強烈にペニスを吸い上げる。唾液に溢れた暖かい女教師の口内でペニスの先が口腔粘膜で絞られた。これでは今すぐにでも射精してしまう。

「だっだめえつ！ そんなに激しく吸わないでえつつ！」

あまりの快感に耐えきれず、反射的に腰を引いていた。両手、両足はベルトで固定されているが、腰はある程度自由になる。

ポンっ！

と湿り気混じりの甲高い音を響かせて、ペニスが綾乃の口内から抜ける。それだけ強く吸われていたということだ。

「ああんっ。そうきたカー。でもトモヒコにはキビしいネー」

場所はハンモックの上だ。身体を支えているのは目の粗いネットのみで、不安定この上ない。身体をくの字に折り曲げているのだが、すぐに腕や内腿の筋肉、そして薄い腹筋がプルプルと痙攣しはじめた。

ハンモックの下で二人の女教師が、腹を空かせた牝獣のような顔をして自分を見上げている。罨にかかった獲物が力尽き、餌として落ちて来るのを待っているようだ。

「くっ——くうっ……ふはっ」

智彦は止めていた息を吐き出した。これ以上踏ん張れない。全身から力が抜ける。くの字にしていた腰が落ち、再びペニスがネットの下に突き出された。

待ち構えていた二枚の牝舌が凄まじい速さで躍りかかる。

はぶっうっ！　ちゆるるるっ！　ぬろれろれろっ！

まるで餌に群がるピラニアだった。女教師の舌と唇が剥き身の極太ソーセイジに襲いかかる。湿った音を大きく響かせながら、肉をこそげとるようにむしゃぶりまわしてくる。その強烈な快感が、生殖器官から背筋を通り智彦の脳天まで突きぬけた。

「くああっ、ら、らめえつ、そんなにされたらあおちんちんがあっ！」

肉の芯まで舐め溶かされそうだ。智彦は悦楽の喘ぎ声を発し続けた。もう恥も外聞もない。不自然な姿勢を維持するため無駄な体力を使い、今は力尽きてハンモックの上で脱力状態なのだ。何かに耐えたり踏ん張ったりするような、肉体的な我慢をすることができなかった。

感じたまま喘ぐ。しなやかな牝舌が快感器官をへろへろと這い回る快感に背筋をビリビリと痙攣させる。柔らかな唇で吸いつきねぶられると反射的に顎が反れ、瞳が大きく見開かれた。

「むちゅんっはああん。おちんぽおっビクビクしてるんのおっ」

ペニスの肉胴部分は綾乃の指が絡みつきぬちゅぬちゅと淫靡な音を響かせながら扱かれていた。そして二人の口は少年の最も敏感な亀頭をねぶっている。薄皮がパンパンに膨れた肉先を女教師の唇がねつとりと包みこんでいた。僅かに顔を動かしながら息を吸い唇をへばりつけるようにしてむしゃぶりまわしている。ペニスの先端のみに集中して施される極限の口腔奉仕に喘ぎ声が止められない。二人の唾液の滑りと舌の弾力、そして唇の柔らかなさと熱い呼吸が一体となり肉先全面を覆い尽くしている。

——おちんちんの先つちよが気持ちよすぎるよおっ！

時折ちゅふるちゅふると湿った音が漏れる。二人の動きが完全にシンクロしているため

に、唇の境界線は激しく揺らめいているにもかかわらずペニスの肉先は露出しない。密閉された口腔内で執拗に小穴に絡みつき、肉先を這い回る舌の動きが少年の臨界点を舐め溶かした。

「イツっ、イツちゃうよおおっ、いつ、いつちゃううつつつつ！」

陰囊で五日間放出されることなく熟成されていた精液が、太い灼熱の筋となり細い尿道の中を一気に駆けぬけていく。

びぶっ！ びぶぶっ！

噴出したザーメンはその出口を執拗につついていて二枚の舌尖に直撃し、女教師たちの口内にたまっていった。

どぎゅっどぶどぶぶっどぶどぶぶぶっ！

我慢し続けていた性欲を思う存分解放する快感で脳裏が真っ白になっている。半開きの口元からはだらしなく涎を垂れ流し、牡の快感に浸りきる。

大量の牡汁は興奮しきっていた牝獣二匹の口内を満たし、密着した唇の狭間からとぶとぶと漏れだしていた。綾乃の細い顎とリオジーナの褐色の顎に、白濁した粘液がトロトロと伝い流れていく。

智彦が長い射精を終えると息ませていた全身から力が抜け、ハンモックの上でぐったりと脱力した。激しい脈動を終えた肉棒はまだヒクヒクと痙攣し女教師たちが啜えている。

「うふふつ。さすが五日間の熟成一番絞りね。濃厚すぎてクラクラするわ」

口内に吐き出されたザーメンを飲み込み綾乃が顔を上げた。リオジーナは尿道に残った残滓までちゅうちゅうと吸い込んでいる。その執拗さにイッたばかりで敏感になっている智彦はゾワゾワと背筋を粟立たせていた。最後の一滴まで搾り取られてしまう。

「も、もう、ここから……下ろしてください」

荒い呼吸を繰り返しながら呟いた。

「なにトボケタこといつてるカー」

惚けた口調でそう言ったのはリオジーナだった。

「勝手にイッたら許さないって言ったわよね」

綾乃のセリフだ。視線を向けると魅惑的な唇を僅かに吊り上げた。

「次はちゃんと我慢するのよ」

——つ、次って……。

射精の余韻で赤く火照っていた智彦の顔がサツと青くなる。

「ま、まだ続ける気ですか!？」

「まだ始まったばかりじゃない」

「イマからたのしくなってくるカンジねー」

リオジーナがハンモックの一部をナイフで切り裂いた。

智彦の股間部分より僅かに下——太腿の間のスペースだ。女体育教師はその穴に頭を突っ込むと、少年の臀部を両手で固定した。これでもう腰を浮かせて逃げることはできない。いまだネットの隙間からはペニスだけがぶら下がっている。イッた直後だというのに、まだ充分な硬度を保っていた。

リオジーナが片手で腰を押さえたまま、ジャージのファスナーを胸の谷間が覗く所まで引き下ろす。伸縮性の高いジャージを着ているために、重たげな乳房はキュッと寄せあわされ褐色の乳肌がパンと張り詰めていた。

その乳肉の狭間が涎で濡れ光るペニスの先に当てられる。

「わわっ。ま、まさかそのまま……くはあっ！」

少年の言葉は最後まで続かなかった。リオジーナが膝立ちの姿勢になり上半身を持ち上げたからだ。ペニスの先が密着していた胸の谷間に突き入れられる。唾液がローションの代わりとなり、なんの抵抗もなくヌルンと侵入していった。

最も敏感な肉器官が独特の弾力と柔らかさに包まれる。その快感で口元がだらしなく半開きになる。牝脂のたっぷり詰まった巨乳でなくては味わえない感触に、背筋がゾワゾワと粟立った。女の肉に包まれた心地良さと、射精直後の敏感ペニスに加わる巨乳の圧迫感が、智彦の顎を仰げ反らせる。目の前に綾乃の顔があった。

「うふふふっ。だらしのない顔をしちゃって」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**